

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

金秀美「源氏物語論——空間表現と物語の方法——」

金秀美氏の学位請求論文「源氏物語論——空間表現と物語の方法——」は、序章及びⅠ～Ⅲの3部（全部で10の章）から成っている。全体の分量は、400字詰原稿用紙に換算して500枚強である。査読付きの学会誌に掲載された論考（3本）のほか、紀要、論集の掲載論文等を礎稿とする章を含むが、「源氏物語論」としての体系性を確保すべく全面的に手が加えられ、『源氏物語』の「空間表現」という一貫するテーマを追究した研究論文にまとめられている。

『源氏物語』という長篇においては、さまざまな場面において「空間」に関わる表現が散見される。本論文はその表現を検討・考察の対象としているわけだが、これは有意義な観点であるといえよう。『源氏物語』において「空間」に関する叙述は、総じて非常に曖昧である。それゆえ、従来の諸注釈においても解釈が分かれる箇所がかなり多い。本論文では、先行の諸研究を参看し、堅実な考証を加えつつ、従来の諸説を更新するような見解が示されている。さらに加えて、当の空間表現が物語の展開に関与するような方法たり得ていることをも明らかにしようとしている。

5つの章から成る「Ⅰ 作中人物の移動と空間表現」では、作中人物の「移動」に注目することで、物語における〈場〉の意義、あるいは空間と物語展開との関わりなどが論じられている。

第一章では、若紫巻における光源氏の北山への移動がとりあげられる。北山という場所、あるいは作中人物の位置する空間についての表現が、隠されていた紫の君を獲得するという光源氏の物語の展開を暗示していると論じている。また「付節」においては、北山の段が『遊仙窟』に依拠しているという先行研究の成果をふまえながら、主人公の移動・空間表現等においても『遊仙窟』との類似点がみられ、仙境的イメージをもたらしていると論じる。ここから、北山と平安京との関わりなどにまで論が発展することが望まれるところだが、北山の段における空間表現が詳細に論じられている点、評価に値しよう。つづく第二章と第三章では、光源氏の流謫の地である須磨をとりあげている。第二章では、従来「海づら」として論じられるばかりであった須磨が、本文中において「山里」としても設定されている点に着目し、須磨が単なる流謫の地としてだけではなく、風流を体現する人物の生活にふさわしい「山里」でもあるという二面性をとらえる。さらに、その二面性について、流離から復活して栄華を獲得する光源氏のその後の物語を示唆するものと位置づけている。従来の須磨流謫に関する幾多の論を超えて、物語空間の性質が単一ではないことを明らかにする好論である。つづく第三章は、須磨巻末から次の明石巻の冒頭にかけて語られる暴風雨の場面をとりあげる。この場面では、海に関する空間表現が頻出するのだが、それは明石という畿外の地への越境がなされる直前にあって、須磨という現実の土地に「異郷」の意味合いを現出させる表現であると論じている。従来の議論では、海に関する叙述をすべて明石に関わらせていたが、須磨から明石への展開に連動する表現としてとらえた点に意義が認められよう。次いで、第四章では、松風巻における桂の院が検討される。これまで、光源氏の饗宴の場面ということで、あくまでも光源氏にとっての桂の院の意義が論じられてきたのだが、ここでは伊勢の詠歌、『うつほ物語』「桂の段」等との関わりに留意して、大堰に滞在する明石君の重層的な造型に関わることを明らかにされる。つづく第五章では、九州から上京して、光源氏のもとで暮らすことになるまでの玉鬘の移動を論じている。殊に、従来あまり注目されなかった場所

である椿市と九条とがいずれも〈市〉に関わる地であることから、〈市〉で失ったものを取り戻すというパターンの説話と玉鬘物語との類似にも言及した上で、玉鬘の人物造型の方法についても新見解を提示するという意欲的な論考である。

3つの章から成る「Ⅱ 建築内部の空間表現と物語世界」では、寝殿造という建築内部における人物の小さな移動が検討の対象となっている。建築内部の叙述は曖昧な点が多く、難解である。本論文では、先行研究を丁寧にフォローしつつ建築空間の考証に取り組んだ上で、当の空間が物語の展開において有する意義などまで考察している。

第六章は、夕霧巻に出てくる小野の山荘をとりあげている。諸注釈等の慎重な吟味から、落葉宮に対する夕霧の暴力的な移動を読み取るという、新しい見方が示されている。第七章では、紅梅巻における紅梅大納言の邸宅について論じている。「七間の寝殿」という特異な表現から大納言の位境が示されること、また寝殿内の空間配置が大納言と継子の姫君（宮の御方）との関係にも密接に関わることを説明している。第八章は、総角巻の大君と薫との「隔て」を論じている。従来も注目されてきた「隔て」の問題だが、本論文では障子と戸締まり具が二人の位相を示すだけでなく、「隔て」の維持と破壊という背反する状況が、この二人の新たな（結縁・離別のいずれにも帰属しない）男女関係と照応するものと解している。空間表現と物語展開との密接な関係をよく説明し得ている。

「Ⅲ 住まいの文化と物語の空間表現」は、貴族の住まいに関わる建具・戸締まり具そのものに着目する2つの章から成る。

第九章では、障子などの建具が可変的であることが、特に対面・侵入などといった人物どうしの交渉に連動することを明らかにしている。第十章では、「じやう」「かけがね」「さすがね」「かぎ」などの戸締まり具について、従来の諸注釈・諸論考がほとんど無頓着であった点を批判し、それらの違いについて考証し、さらには「じやう」と「かけがね」が物語世界内において絶対的な差異を有することを明快に論じている。後者の論では、さらなる綿密な考証の積み重ねを要するとおもわれるが、過去の『源氏物語』研究において、物語空間とそれに付随する諸々の事態についての検討が不十分であったことが明らかにされている点で、論文としてのプライオリティはかなり高いといえる。

上述の如く、本論文は『源氏物語』の空間表現を詳細に検討する論文として従来の研究を刷新する成果といえる。ここに本論文を、早稲田大学における博士(文学)の学位に充分値するものと判断する。

以 上

2007年1月23日

主任審査委員

早稲田大学助教授

博士(文学)早稲田大学

陣野 英則

早稲田大学教授

兼築 信行

早稲田大学専任講師

博士(文学)早稲田大学

河野貴美子

早稲田大学教授

博士(文学)早稲田大学

津本 信博